幽霊との恋

春月桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊との恋

【Ｎコード】

Ｎ８１４５Ｃ

【作者名】

春月桜

【あらすじ】

幽霊が見える中学一年生の桜坂春（さくらざかはる）。そして、その春の家に一緒に住んでいる和輝という幽霊、二人は・・・・・・。

第1話（前書き）

恋愛なような、恋愛じゃないような。
そんなお話です。
でも、ちょっと切ない感じですかね？（？）。

第1話

1、紹介！

私は桜坂（さくらざか）　春（はる）です。

私は中学一年生

髪の毛は黒髪にくせっけのショート。

今時の中学生って感じ？でも、私は普通の子とちがうところが一つある。

それは、幽霊が見えることです。

何で？って？そんなのわかりませんよ。

ただ、お母さんも幽霊が見えると言っている。

私の家族で、幽霊が見えるのはお母さんと私とお姉ちゃんだけ。

私の家族はお父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃんと私なんだ。

五人家族なの。

お兄ちゃんは高校二年生。

お姉ちゃんは中学三年生。

三人とも二個ずつはなれてるんだ。

結構にぎやかな家族です。

2、いつもの朝。

私には友達がいる。

でも、何故かその子も幽霊が見える。

私はその女の子の友達を知ってから、凄く仲良くなった。

その子の名前は波咲（なみさき）　鈴（すず）っていう子。

今日もいつもとかわらない朝の目覚め方。

いつも、幽霊達に起こされる。

私にいつもちょっかいだしてくるやつ。

そいつはまだ成仏できてないみたい。

何でかは知らないけど。

そいつの名前は影河（かげかわ）　和輝（かずき）っていうんだ。

いつもいつも起こすの私のこと。

「おーい、朝だぞー。」

和輝が私の耳元で起こす。

「うるさいなーいつもいつも。何で起こすのよ。」

私は怒りながら和輝に怒った。

「だって、つまんねーんだもん。」

和輝はふわふわと空中に浮きながら私に言った。

「つまんないからって私のこと起こすの？」

私は空中に浮かんでいる和輝に言った。

「だって、お母さんとかお姉さんとか起こすの可愛そうじゃん。」

和輝は私に顔を向けて言った。

「じゃあ、私のことだって起こさないでよ。いつも寝不足でいってんだからね学校に。」

私は和輝に怒りながらベットから起き上がって。

洗面所に向かう。

「ねえねえ、今日、学校おわったら、どっか行く？」

和輝が歯をみがいてるときに言ってきた。

「どっかいってほしいとこでもあんの。」

私は歯ブラシをとめながら鏡に映る和輝に言った。

「やっ、そこまでいきたいとこはないんだけどね。」

和輝はふわふわ飛びながら私に言った。

「じゃあ、家であほんでれば。＊あそんでれば。」

私は歯ブラシを動かしながら和輝にあきれながら言う。

「ええー、ひどい、春。」

和輝は犬みたいにショボーンとしながら言った。

「別にいつもと同じ。」

私は歯ブラシを洗って、うがいをして。

口をふいた。

「次は顔洗い～。」

和輝は浮きながら歌った。

「何？いきなり、なんで歌うの？」

私は顔に水をかけながら和輝に言った。

「だって、つまんないんだもん。春遊んでくれないし。」

和輝はほっぺをふくらました。

くすくす

私は笑ってしまった。

だって、和輝のふくらましたほっぺが赤くなってるんもん。

また、可愛いんだよ。

「私、和輝のほっぺがふくらむの好き。」

私は和輝にゆるく笑顔で言った。

「え。」

和輝は頬が赤くなった。

「？」

私は何故赤くなったのはわからない。

「な、なんでもねー。」

「な、何？いきなり。」

「別に」

和輝は後にむいた。

和輝の耳が赤くなってる。

和輝の耳が赤くなってるときは照れてるとき、とか恥ずかしいとき。

「何？照れてんの？」

私は笑いながら和輝の耳元にささやいた。

ビクッ！

和輝は私のほうに顔を向けた。

ぷくくくくく…

私は笑いをこらえながら笑った。

「笑うんだったら普通に笑えよ。」

和輝は赤い顔を私にむけながら言った。

「あはは、ごめんごめん。」

私は和輝の通り抜ける肩に手でポンッポンッと叩いた。

やっぱり感触はない。
だって幽霊だもん。
でも、かすかにあったかい。
その感触は好き。
「たく。」
和輝はまたほっぺをふくらました。
「あはは、さ、着替えよーと。」
私は自分の部屋に入った。
「入ってくんなよ。」
私は二階からあがってくる和輝をとめた。
「はーい。」
和輝はそう言って、階段に腰をかけた。
ガチャッ・バタン
私はパジャマを脱ぎ、最初に上をきて。
下をはく。

いつもと同じ制服に着替えた。

ガチャッ

「終わったよ。」

私は階段に腰をかけてムスッとした顔で待ってる和輝に言った。

「以外に長い。」

和輝が浮かない顔をして、私に言った。

「そんな制服、一分で着替えられる。」

和輝は浮かびながら私のほうに近づいてくる。

「女の子は大変なのよ。」

私は笑顔で和輝に言った。

「そうか？」

和輝が首をかしげた。

「そうなの。さあ、お母さんを起こすよして、ご飯食べよ。」

私は笑いながら和輝にささやいた。

「うん。」

和輝はまた何故か赤くなって私から目をそらす。

私と和輝はお母さんが寝ている一階におりていく。

ガチャッ

一階には部屋が一一部屋しかない。

お母さんとお父さんが寝る部屋だけ。

お父さんは相変わらず仕事に出て行ってる。

いつも、六時ぐらいにでるから。

「お母さん、朝だよ。」

私はお母さんの掛け布団から突き出している肩をゆらしながらお母さんを起こす。

「ううー、もう朝？もう少し寝ていたいわ…。」

お母さんは目をこすりながら起き上がる。

「もう朝です。」

私はあきれながらお母さんに言った。

「はいはい。」

お母さんはベットからパジャマ姿で出てきた。

「じゃあ、春は洗濯しといてちょーだい。」

お母さんはいつもと同じことを言った。

「はーい。いくよ和輝。」

私は和輝にガッツポーズを見せながら言った。

「はいはい。」

和輝はお母さんがさっき言った言葉をまねた。

たったったっ…

私は一階にある庭の物干し竿に洗濯物を干した。

今日もいい天気で、日が差しこんで来る。

日は輝き、光、まぶしくて。

私は一階深呼吸した、そして、一階のびして、洗濯物入れを片付けた。

また、今日が始まる、一日、一日、ちがう一日。

今日はどんな一日になるんだろうか。

私はベランダから朝日を見ていた。

「春ー、朝ごはんよー。」

台所からお母さんの声が響いてきた。

「はーい。」

私はリビングにむかった。

いつもとちがう一日一日、でも、今日はすごくちがうことになった。

2、見知らぬ幽霊（かっこいい）・・・？！

「おはよー。鈴。」

私は和輝と鈴に飛びついた。

「おはよ、相変わらず元気だね、春は。」

鈴はのほほ～んとしながら言った。

「うん。」

「おはよう、和輝。」

鈴はいつも和輝にニコッとしながらあいさつする。

「ああ、おはよう。」

和輝は鈴に比べて全然眼中にないって感じ。

「今日は数学、教えてね。よくわかんないんだ。」

私は頭をかきながら照れた。

「うん、いいけど。いつものことだし。でも、わかんないままにしないのは春の良いところだと思うよ？少なくとも私は。」

鈴は私のことをちゃんといいことで返してくれる、ちゃんと私をうけとめてくれる。

すごくいい子。

私の大好きな友達、大切な人。

「ん？」

鈴は立ち止まった。

「どうしたの？鈴。」

私は鈴の見ているところを言いながら見た。

「誰かな？あの人、幽霊だとはわかるけど。」

私と鈴が見たものは、幽霊の男の人だった。

髪の毛は金髪で、かっこいい、ブランド物のTシャツに腰には長袖のジャンバーを巻いて、ジーパンの長ズボン、腰にチェーンがついている。

「あの、すいません、どなたでしょう？」

私は単刀直入に言った。

「おじょうちゃん、俺が見えるの？」

金髪の人が私に聞いてきた。

「私、幽霊が見えるんです。後、この子も。」

私は鈴のほうに指をむけた。

ペコッ

鈴はお辞儀をした。

「かわいいね、君たち、あ、そうだ、幽霊が見えるってことはどっちかが、桜坂　春ちゃんだね？」

金髪の人は私に言ってきた。

「はい、私が桜坂　春ですけど？何か私に用でも？」

私は首をかしげながら聞いた。

「ああ、まあね。」

バッ

いきなり私の目の前に和輝が立った。

「な、何？和輝、いきなり。」

私は和輝の顔をのぞきこんだ。

「君は、もう、死んでいるみたいだね？」

金髪の人は何かをたくらんでいるかのような少し怖い顔をしたみたいに見えて、私はぞくっとした。

「ああ、死んでるさ、でも、それはお前もだろ？」

和輝は怖い顔をしていた、怒っている顔だった。

「ああ、そうだね？それで？、何？そのガードみたいな手は。」

金髪の人は笑いながら言った。

「こいつには指一本もふれるなよ。」

和輝は怒りに満ちた目をしている。

「何で？」

金髪の人は相変わらずひょうひょうとしている。

「お前から、すごくいやな匂いがする。」

和輝はほとんど獣になっていた。

幽霊には二つの種族があるの、獣からきた幽霊と、人間からきた幽霊と、二種類あるの。

和輝は獣から来た幽霊だから、獣に化けられる。

グルルルル…

和輝の顔は獣になりつつあった。

目は赤くなり、牙はむきはじめ、ほとんど獣になっている。

和輝が獣になるのは大変なことになる。

「だめ、和輝！だめだよ。ここで獣になっちゃだめ、姿が見られてしまう！」

私は和輝に抱きついた。

ギュッ

パッ

「あ。」

和輝は一瞬にしてもどった。

「ごめん、また。」

和輝は落ち込んだ。

「大丈夫、私は何ともないから。いいよ、無理して獣になったら、我を忘れてしまうから、いいよ、私のために獣にならなくていいよ。」

私は抱きついたまま、和輝に言った。

「ごめん、つい。もうすこしで我を忘れてしまうところだった。」

和輝はショボンとした声で言った。

「大丈夫、私は平気だから、我を忘れてしまったら、鈴だって、まきこむことになるから、今はおさえて。」

私はギュッと和輝を抱きしめた。

「もう、大丈夫、ありがとう。」

和輝は私のほうに体をむけて、私にすがりつくように私のことをつつんだ。

そのぬくもりはとても、あたたかくて、とても、幽霊には思えなかった。

「すいませーん、お取り込み中わるいんですけどー。僕ー春ちゃん

にようがあるんですけどー。」

金髪の人は私のことを呼んだ。

「で、何の用でしょう?、私に。」

私は抱きしめていた、和輝から手を片手だけはなし、手をつないだまま、金髪の人に聞いた。

「あのね?君をさらいにきたんだよ。」

金髪の人はにっこりと顔をかえて、私にほほえんだ。

「え?」

ビュオッ

いきなり私の周りに風が吹き荒れる。

「キャアッ!!」

「では、君がアクルスデスにくることをまっているよ。」

金髪の人はそういって、私を風と一緒にちがう世界に連れて行ってしまった。

「春ー!!!」

和輝は叫んだ、声が届かない、春を呼んだ。

「春…。」

鈴も、呼んだ、ちがう、世界へと連れて行かれてしまった、春を…。

これから、どうなるの？

第1話（後書き）

また、続きをかくのでよかったら見てください。
おわったら、ぜひ、感想をください。

第2話

第2話

1、世の中に存在しない世界？

私は目を覚ました。

私の目の前には見たことのない世界が広がっていた。

「ここは、どこ？」

私は目をこすり、もう一回世界を見た。

「目をおさましか？」

いきなりドアが開いて私に話しかけた。

「誰？あなた、さっきからなんなの？私を何故ここに連れてきたの？」

私は金髪の男の人に警戒する目で強く言った。

少しでも、迫力が出るように。

「ひどいな、そんな言い方。」

金髪の人はのにこやかに私に言いかけた。

「あなたは誰か教えて。ここはどこ？」

私は金髪の人に言った。

「しょうがない。俺は、漣廉（さざなみれん）。この城の護衛ってとこかな？君をさらいに行ったって感じかな？」

漣と言う人はにこっとしながら私に話し始めた。

「ここはアクルスデスという世界なんだ。ここは、本当は人間は入れないんだ。けど、君は特別におゆるしをいただいてる。それは、君は本当はこっちの世界の人間なんだ。」

漣は真剣に私に目をむけている。

「ごめんなさい。言ってることがよくわからないんですけど…。」

私はその真剣な目をそらしながら言った。

「つまり、君は一回死んでいるんだよ。」

私はその一言で漣に目をむけた。

「どうゆうこと？！私は死んでるの？！！」

私は漣に必死にしがみつくように聞いた。

2、私は死ぬの？！！

「おちついて、君は今は死んでいない、けど、一回自分で自殺して、死んだ、けど、君は閻魔様に生きて帰っていいとおゆるしをいただけたんだ。けど、このアクルスデスの王は君だけをゆるさなかった。みんな死んでいる人はこのアクルスデスにきて平和に暮らしているんだ、なのに、君だけは生き返ったそのことにアクルスデスの王は怒り、君をここで処刑すると言った。そして…。」

「ここに連れて来たのね？」

私はしがみついていた手を離し、落ち込みながら元の正気にもどった。

「悪いけど、ここは（アクルスデス）、君のことは許しはしないよ。処刑はここで一週間後に行う。」

漣は苦しそうに私を見ながら、そう言った。

私は漣がボソッとごめんとつぶやいたのがわかった。

「私は、ここで処刑されたら人間界にもどれないの？」

私は漣に何もかも見失ってるボーッとしている顔で聞いた。

「ああ、人間界に君を知っている人はいなくなる。そして、君はも

う生き返られない。そし
て、ここでも、生きられなくなる。」

「どうゆうこと？」

私はまた、よくわからなくて聞いた。

「君はこのアクルスデスで処刑されてしまうから、もっとつらいと
ころにいく。」

漣は下の方を向きながら私に言った。

言ったというよりも警告したって感じ。

「地獄ってこと？」

私は苦しい顔になった。

「ああ。」

漣はそれだけ言って出て行ってしまった。

～私は誰にもあえなくなってしまうの？

鈴にも？和輝にも？

そんなのいやだよ。誰か！誰か助けに来てよ！　～

私は鍵が閉まった。

城のドアをバンバン叩いた。

手が赤くなるまで、痛くなるまで。

でも、誰も助けてはくれなかった。

誰も。

誰も。

誰も…。

私はずっとベットに寝ていた。

寝ていたというよりも寝転んでいた。

ボーッとしていた。

何も考えられなかった。

ただ、「死ぬ」という言葉が頭の中で流れているだけだった。

いつもみたいに笑って朝をむかえられないの？鈴に、和輝にあえなくなるの？そんなのいやよ。

けど、だからといってここから逃げられるわけでもないのよ？

どうするの？これから。

和輝ー。

和輝ー。

私は寝言でも、和輝を呼んだ。

和輝ー！助けてよ！ー。

第2話（後書き）

読んでくれてありがとうございました。
感想・評価、送ってくれると嬉しいです。

第3話（前書き）

結構はやい、展開ですが、最後まで読んでくれると、とても、うれしいです。

第3話

第3話

1、和輝?!

一週間の一日に入った。

昨日は一週間後に処刑をすると言われて笑って朝を起きれなくなった。

「あと六日。」

私はボソッと独り言を言った。

その時、コツコツとガラスにが鳴った。

私は鳴ったガラスの方を見た、なんと、いるはずのない和輝がガラスを叩いていた。

「何で?!」

私は大声を出してしまった。

ガチャッ

「何事だ！！」

鍵が開いてドアがいきなり開いた。

「いえ、別に。」

私は何もないふりをして私はボーッとしているふりをした。

「そうか、それならいいが。」

バタンッ

ガチャッ

また、ドアが閉まって鍵もかけられた。

私はガラスの窓のほうを見た。

和輝が窓の外で困った顔で笑いながら口に人差し指を立ててあてていた。

私はその和輝に小声でごめんとあやまった。

いつもみたいに笑えた。

でも、ガラスの窓は鍵が外にかかっていて開けられないから出るのは無理なのだ。

和輝は方にさげてるポシェットみたいなものから針金を出した。

そして、くさりにかかってる南京錠の鍵穴にその針金を刺し込んだ。

かちゃかちゃ……

ガチャン！

そして、南京錠のかかってた鍵が開いた…と同時に城のブザーが鳴った。

ジリリリリリリ！！！

鎖を窓からとるとガラスの窓は開き外から、入れるようになった。

「はやく、はやく来るんだ、春！！」

和輝はいそぎながら私に言った。

私は和輝が差し伸べた手に手をのせた。

和輝は私ののせた手を握り締め、グッと和輝のほうに引き寄せた。

「はやく、ここから逃げよう。」

和輝は私の耳元で言った。

私は何も言えず、ギュッと和輝に抱きついた。

何で、言えないか？

だって、泣きそうだったんだもん。

それは言えないでしょう？泣きそうな声は震えてるでしょ？だから言えなかったの。

「誰だー！！！」

警備のやつらがみんなこっちに来た。

「ヤバッ！飛ぶぞ、つかまってろよ？」

コクン

私は小さくうなずいた。

和輝は思いっきり窓のふちをけり空に飛び立った。

その後を軽微の人達が追ってきた。

「ヘッ、俺に追いつけるかな？」

和輝は遊び感覚で言ったように聞こえた。

出口はアクルスデスの一番下にある。

バンッ

「よし、人間界だ、あいつらはあそこの住民だからあそこからは出られないんだ。もう大丈夫、あの金髪野郎も来ねぇよ、あいつ、一回、人間界に来ちゃったもん。」

和輝は下に下りながら和輝は言った。

「何で、一回人間界に来たら、もう、来れなくなっちゃうの？」

私は和輝に尋ねた。

「それはな？アルクスデスの住人が人間界に来て、もう一回、行ったらあいつらは消えちまうんだ。で、こっちにいるやつがアルクスデスにいったら一発で消えちまうってわけさ。そうゆう決まりなの。」

和輝は苦笑いしながら言った。

「え？それじゃあ、和輝は……。」

私は、和輝を見た。

和輝は目が潤んでいた。

きっと、涙を目にためている。

「ああ、消えちまう。」

和輝は目をそらしながら辛そうに言った。

「さ、ついた。これでさよならだ。」

和輝は作り笑いをした。

「やだよ。ずっとそばにいてよ。ずっと、ずっと。一緒にご飯食べようよ。」

私は泣きながら、和輝をひきとめた。

「ごめん。無理なことは無理なんだ。」

和輝は涙をうかべて私に言った。

やだよ、いっちゃいやだよ！和輝！

第3話（後書き）

この、後書きを読んでいるということは、最後まで、呼んでくれたということですね。
まことにありがとうございます。
何か、店の定員見たいですね（笑）。
できたら、感想を書いてただけたら、うれしいです。
次回はとうとう最終話です。
ぜひ、ごらんください。

最終話（前書き）

ついに、最終話です！！
どうぞ、最後まで、楽しんでください。

最終話

最終話

1、さようなら…和輝。

「和輝は何で人間界に来たの？」

私は涙を流しながら和輝に聞いた。

「それは、好きな人に逢いに来た。」

和輝は作り笑いをして私に言った。

「誰なの？好きな人って。」

私も、精一杯の笑顔をして、和輝に言った。

「お前だよ。お前が死ぬ前は、俺とお前はクラスメートでさ、俺はいつも、友達と楽しそうに話してるお前が好きだった。色々ちょっかいも出したりして、ひっかかって、楽しかった。でも、お前はあんなに仲良さげに話してた友達達と何かあったみたいで、生きるのが辛くて自殺したんだ。だから、俺は一緒に死のうと思った。でも、お前はまた生き返った。でも、俺は、生き返れなかった、だから、幽霊になって、お前に逢いに行こうと人間界に来たんだ。そしたら、お前は幽霊が見えるっていうから、すごく、すっごく、嬉しかったんだ。楽しかった、お前と過ごす日は、たまには喧嘩もしたけど、

それも、楽しいうちに入る。ありがとな？春。」

和輝は泣きながら精一杯の笑顔で笑った。

「いや、私も、せっかく好きになったのに！好きになれたのに。こんな、さよなら。いやだよー。」

私はまた泣き出してしまった。

「大好きだよ。消えちまったって俺は、お前が好きだから、安心しろ。浮気なんてしないから。」

和輝は泣き出してしまった私を抱きしめてくれた。

あったかくて、大きくて、私の大好きな瞬間。

でも、それもなくなる。

「大好きだよ。」

私は顔をあげて、和輝にキスをした。

軽くだったけど。

和輝は笑って、「ありがとう」そう言って、足元から消えていってしまった。

さようなら。

そして、ありがとう。大好きだったよ、和輝。

私の恋、それは、

かなわない恋

最終話（後書き）

どうでしてた？
気に入っていただけたでしょうか。
はやい、結末になってしまいましたが。
楽しんでいただけたなら、私も、うれしいです。
感想・評価をいただけたら、とてもうれしいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8145c/

幽霊との恋

2010年11月23日16時34分発行